

〔「宋と遼・金・西夏のやきもの」展によせて〕 草原のやきもの—遼の陶磁器とその研究—

10世紀初め、耶律阿保機が中国北方の遊牧民族の契丹族を統一し、916年に国号を大契丹として即位し、中原と国境を接する広大な国土を納める国となりました。921年には河北に南下し、定州を攻めるとともに、926年には渤海を滅ぼして東丹国を作り、また高麗に侵攻するなど、積極的な対外政策をとっています。遼は日本とも通交があり、『遼史』には11世紀初めに日本からの使者が遼を訪れたという記録が見られます。

- ・大安七年(1091)「九月(中略)己亥、日本国遣鄭元、鄭心及僧応范等二十八人來貢」
- ・大安八年(1092)「九月(中略)丁未、日本国遣使來貢」

946年には五代十国時代の後晋を滅ぼし、翌年、その首都であった開封に耶律堯骨(阿保機の次男)が入り、国号を「大遼」とします。1004年には北宋と澶淵の盟を結び、以降、北宋は毎年銀や絹を遼に貢いでおり、1125年に金によって遼が滅ぼされるまで、こうした関係が続くこととなります。

遼(契丹)は現在の北京市や河北省北部、山西省北端部以北の遼寧省や内モンゴル自治区を含む広い範囲を領土とし、五京(上京臨潢府、中京大定府、東京遼陽府、南京析津府、西京大同府)を定め、城都としました。遼の主要な窯址である林東遼上京窯(内モンゴル自治区赤峰市巴林左旗)や缸瓦(乾瓦)窯(内モンゴル自治区赤峰市)、缸首屯窯(遼寧省瀋陽市)、北京

龍泉務窯(北京市)、大同青磁窯(山西省大同市)はすべて五京付近に設けられており、宮城建造や人々の需要を賄っていたと考えられています。林東遼上京窯は主に白磁や黒釉磁・緑釉を焼造し、缸瓦窯では定窯白磁写しや磁州窯風の陶器、遼三彩が焼造されています。

韓師訓墓(110年没、河北省張家口市宣化区)の後室南壁西側壁画(図1:参考図版)では、祝宴を催す人々の楽しそうな姿が描かれています。その中には碗や輪花形の盤、酒を入れているとみられる壺などが描かれており、陶磁器が遼の人々にとって重要な存在であったことがわかります。遼時代に漢人有力者の一族であった張文藻の墓(遼・咸雍十年(1074)没、大安九年(1093)埋葬、河北省張家口市宣化区)は盗掘を受けておらず、副葬品などがそのままの状態で見られている貴重な例です(図2:参考図版)。墳墓の後室には張文藻とその妻が火葬されて木棺に納められ、その前に置かれた卓には、干しぶどう、栗、檳榔、豆や麺などの食物が盛られた食器が並べられています。白磁の碗、銅製匙などとともに、黄釉の龍頭柄付碗や唾壺があり、当時の使用状況や、求められた生活の様子をうかがうことができます。

遊牧民族の契丹族は金銀器など金属工芸の高い技術を有していましたが、陶磁器に対する憧れや需要も高く、遼の陶磁器には定窯の影響を受けた白磁や磁州窯系のやきもの他、遼三彩や緑・褐釉

磁、黒磁、青磁などがあり、主に中国北方の陶磁器の影響を受けて製陶されています。器表面に印花(型押し)で文様を施す技法は定窯白磁や景德鎮窯青白磁などで陰刻とともに行われて、淡い色の濃淡により洗練された上品な作風に仕上げられています。遼の三彩や緑釉・黄釉が掛けられた陶磁器にも多用されています(図3)。器形では、「鶏冠壺(皮囊壺)」と呼ばれる皮袋を模した特徴的な形(図4)や鳳首瓶(図5)、緩やかなカーブを描く長壺などが遼特有の器形として見られます。

また、遼の会同五年(942)耶律羽之墓(内モンゴル自治区赤峰市)のように、領土内の墳墓の副葬品や仏塔への奉納品などの出土品には定窯や越州窯の白磁や青磁も出土しており、五代や北宋から数多くの陶磁器がもたらされていたことがわかります。遼は占領地から捕虜を連れてきたため、領土内には漢族の他に女真、回鶻なども居住していました。近年でも、2007年に発掘された内モンゴル自治区の応曆十年(960)の遼祖陵一号陪葬墓(赤峰市)や、2015年に発掘された統和十一年(993)の蕭貴妃墓(錫林郭勒盟多倫県)から越州窯青磁の優品が出土しているほか、遼の高官となった漢族の韓佚(995年没)と妻王氏の合葬墓(北京市)からは、北方の定窯白磁と共に南方の越州窯青磁の優品が出土しており、南北で文化交流が広く行われていた様相を反映しています。

遼の遺跡は19世紀末より知られるようになり、1930年代には鳥居龍藏や関野貞をはじめ、田村実造、小林行雄、江上波夫らによって慶州

白塔(釈迦如来仏舎利塔)や慶陵の調査が行われています。遼(契丹)の陶磁器研究には、後に奈良国立博物館長となる黒田源次や中国美術研究者の杉村勇造など満州に渡った日本の研究者が深く関わり、唐三彩とは異なる三彩陶が遼三彩とされ、また「鶏冠壺(皮囊壺)」が遼の陶磁器として認識されるようになりました。また、小山富士夫らによる林東窯や缸瓦窯の発掘調査が行われ、遼磁の基礎ともなる研究が進められました。遼の領域の紀年墓を含む遺跡からの出土品は多いものの、遼の陶磁器については、遼で作られたものとともに北宋からもたらされた定窯白磁や越州窯青磁、景德鎮窯青白磁などもあり、また、中原からの陶工が遼で作った可能性もあるため、遼の陶磁器や窯の活動期に関する明確な規定が未だ難しいのも現状と言えます。今回は大和文華館所蔵品に加えて、京都大学総合博物館及び愛知県陶磁美術館から遼の陶磁器を中心に16件拝借して展示いたします。唐や五代・北宋の技術を取り入れて製陶を行った遼のやきものルーツに想いを馳せ、草原で生み出された大らかな魅力を感じ取っていただければ幸いです。(瀧朝子)

※図1:2は、河北省文物研究所『宣化遼墓—1974~1993年考古発掘報告』文物出版社、2001年より複製いたしました。



図1 韓師訓墓壁画 遼時代



図2 張文藻墓の内部



図3 緑釉印花唐草文碗
缸瓦窯 愛知県陶磁美術館



図4 緑釉鶏冠壺
京都大学総合博物館

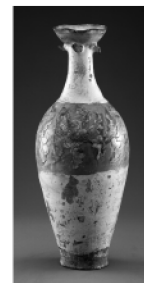


図5 鳳首播落緑釉
牡丹文瓶 缸瓦窯

季刊 美のたより No.201

平成30年 1月 5日

発行 大和文華館